千鳥　四

E 23
48

東京大学総合図書館

冬住

東京帝國大學圖書印

東京大学総合図書館

冬住

丁内資料
東京大学総合図書館

東京帝國大學圖書印

東京大学総合図書館

六條まてハ御志のひありさはゆゝり
申して給ハ中宮へ太政乃光のよのつく
まいらせ給ハまゐりけり末つかたさん
よて五條あり家おはしまし海東
いはへ方の吹いはしあり気も人て大通
三川先はをて申せ候ひ家のかとしろへ
けに太政乃はきと見ましつかり七
家乃とまにひの方とい持はとし色
ってみいましけり人々五間もりけ春
ましと道のまそといとよろし涼し夢

0005839147

ウ本目ニ月源ナシ

東京大学総合図書館

れはかり松もし青きよりは青の宮の守
おまへみなみならしさらに空の気色の念て
けるを思ふなりけれはこゝろにある人の気へ
ちそとそへは今日の花のはなつきからんとこそ
かゝりておはしますに御車よりこそ降れ
紅の色の河もなを色給ふき春てのへの
さらんとこそまゐらせ給へとてこのはかなき
紅をもかはさきみの庭にすむとしの事
ふかき人里の河のゝ物けるも行おほと
おほえてはかくのかこゝとおもひけるをは

玉のさてもてあそひさしもさりけるの
抱てはいと赤き物のふたつのつらかりけるよ
もひとしかるなり色紀花はなの色ひとつ
忽見ん乃まゐりて東の河なしこそ人の抱
ゆとひかりなから行をかへ随身はおほむかの
さるなかあり給ふ夕かはとも待花の君
もんめきてかくおほせ君まうてりるも
されなかとはけるに宮はいと小家なら
なりけるかはけるよりこのさいのかへしつゝ河
なとしめてよはひてと世もしかしぬ物

のはなさかりにまひましつゝあるのところ
ましの花れちさらやひとあさむりてまいる
とれ給ひし人のあかしの門ありいつく
かは給ひさいりされ人のをりと心ありき
れのもしのひゝて歯かくあかしより
まいの給ひしなましやうてるてしらまる
くもる有明のさの心すてしあひ成ぬ
をさそきもせよ枝と情ある花をとて
ゝとせ人をは門あ者て此道の紀の
いろくきこへしてあそまつりきぬとこさ

申して侍りしとあるべきかはさかりや地
のあそやこの人給へきと色ある人を侍らぬまゝ
り見れとらかなしく有あはれによき人
ましくと思ふこまやかにあはれてくとり
給ふ此道の川か河ぬのあさりむこのみかい
のかこもすなをと心よりしよひあの種ぬ
くれかしゆりそうつるもひと傳へある身
かとりうしこまりあるき者おもふへりて
思しけるあり思まてへ悲てかへる思ぬへ
侍るものとあめくれまへありてひいり給へを

東京大学総合図書館

らはゝ車のうちより御覧しけれはくちおし
き思ひ給へはゆめ〳〵しかりとも車のうち
よりも見えたまひてのちはかくなりはてぬ
と見ゆる人はゐる事はあるまし御かたの
御有様にてきゝしよりはまさりたまへる之
ことよりけりはかなくも思ひたまふかな地
せられたることゝはしけるにはるかなりけるよ
り世のなかをみてありし御いさめにて
おもひわかれたまひしかは今はかく
世に有ける身のうへ行へしらて出す

さきなりしむかしのやうにてありけるかむかしまさ
にてさたまり世なりたまへることわりなり
おもはさりけんこともとなくすゝみちの
ほとけのみちなりおのかとまやかに申とさ
人はおほくいきなりにけりけるかちとまし
てことにおもはしうかりけるにもへまへ
給ふにこそおもひけれとてそのおほん
おもかけにしてなからうへたもちてはゝ
とみえけるにおもひしか子とも
よりかりけん事をみ御覧しかたけれ

とききゝしらひたくいみ君はいとあはれにおぼし
ほとゝきけあれ侍る程よき女房を
めしよせて御物語ありけるにまへ
人々あまたさふらひけるやいかはるにおほし
召出だして御才覚どもをきかせ給ふにおほ
こゝに人ありとて源のきりあまは朝夕
みもとへ参りしほどに三の宮の御寵愛
時の中将にかはりもいまはことのえていさをしく
ぬらしては召出だしゆかりと御別はれく
ともかくもなきこともやうりかはしと給ふへ

とよのあかりの節の神代よりはじめていと面白き
ことにてありみちのくの宮ありしはいまは
中へまゐる人のいとゞせさりしとあまた君
とゞとかくと見しその子らしかみならしいと
まゐらせ給ひまく〳〵とも〳〵しも青柳
なとなきその節もせさく出節なと堂に
流りあふらふくありその扇の御ほんを
まゐらせてすらしあらばくり君はいと志に
あるかあはりしてかしうきはれに
いかでとりそれもみ方由なる花を……うり

夕ぐれは此丈部そこけられくきまにし
いしら清しおそたちけりゆへ清者(?)の書(?)ハっと
花のいかりけりしかおほし給ふもとりは
此比の清家ハ奉行人々をしそうひきて
うちやとの給へハきハ乃ち清き此何(?)とハ血(?)
つとは清もトはらく此五六日出くくり侍きと
痛むる此年をみ行へおけり此給つそりに
此りの年ハ元きつ侍らとらなとたになや
うり弟(?)とある書もまへてとそ云ひ毎き
奉ちれとしたも二乃扇鳥あへ青山へはりて云霧

清とる此二此はきり乃へつしらもんともうをし
てらんとの始へもみうし此宿とり勇たのこ
ともひくとひきうやうちいのとけるなの
家てりある此侍りなら弟か年よ海りて
母なしワく年このこくもろうくろ事と文
清人人まて来のらふとト申しき事い
未てく人乃え去り給うあやはりんと来
こ石清ハその文清人人女を里ちてりか
ほちて此なる事へくつのなりと先ざ海しる
毎年乃ことやんやおしんと其色とはらく

きこえかはしける心のみじかくけるはすゑとてもかくかくるそ
きしいりこのかくさいはひしうあ海のおもかけし
此角とかこゆる傍てあるあはれさまうきこえ
行川
よるそこそまことにつれなくみえかねてきこえけり
ほのくに細川の花のゆふくあらく川の御随伴
して流るゝさまを見るも皆此海ゆたかなりしはと
きこしめしてらるゝ行の道にはそもおゝ成見るらく
さてゆかしく今もいへる行かして種々き
きもか海ちかくきてまかりうちく流てなり

それはあまくだりけんなるとはし
あらじくまでとかけましとこひくるいこまへ
まつりぬはさ紀の松河のうちてことさらに
くかおほふえしかとふさけくはかりにまく
りりたる世の中の火の光ありたりをみの
うかりあかま世の中のよの所のはまはきて
さいなりとありて此所ありの所を停とみとかかり
のあるて作り行つりうらこそあめぐの行きる海
かき此室世のこのあり行ち身をかまひ
かりあらへ云てけるをしほりて見きし

猶く日ぐらし和の程なり出て猶は朔日の
とくは、あなり人のみてきこえへしとて
いりけりのさあはれなりけりの声ふところの志ことこ
まくはなりし行きにくしも色の旅あしわ
かりあまたとみゆけ姉弟一年に四五にて
まりていたる人の住家なりんとは、ゆきて
ありけめこまし給ひなり道にいり見えあて
さは思ひなりし給人大成よりけるは待いこ
くる見給ひあはれひてるに身はとまさく
ちりくまかりりて身一両あはれきかくほ

もとあかりの手なりく給ものしひとくとは
世の時しりてもくしくて中給をとは、と言ひ
ら、ら月比は給ひより御しかく人あり人なりと
その人に仰せ家の中にて人まゐにまうれし
さとるも中将く中垣のかは、まいりんし侍り
番ありの弟なとも乃に見ゆる弟見て給ひ
らくい御のうへともなり二弟なけくさく
人給あかりきの分夕日に御覧きしり入
くれ給しま文つくりてかくは給し人の仮
たまいとよく給ひし柏のかの弟の君いふしてある

人ハ己者のひくらはくさ海かまかしもの
見て侍と貴き南君しか思を深くまつる
とおもひ侍らぬ我なれとも世かけの人貴ほ月の
ほとなき御事とも乃様人も我ひさしそ身
心毎の道ゆきまて思ひ下て見ゆ所はなん
情なく侍りしく海へかく人乃けしき
かとてそ小松侍りぬ寺なりける年も
この中にもおほかたの松風と思ひなりしか見
所へ海辺も侍ともの我貴法かくなり
いまはせうそこ二日と何かしありきの心は通ふ

まことくはかなき事なれはも侍らすへと云ふ
しらぬ者の人にてまし侍るはとききこ
中に我もなほし君ありいふて侍りし
うけしも乃様の我と思しとも思ひしく
所あるはいとその中に思ひの外をはなる
はかなく見けむ世ありしくもしおもへ侍りて
はかりなりそれも世この心を海に見えけ
うまくとは世の人のよりもおもひぬれ
しかのをりしも心には貴きまゐらせ
下り風まかせにをとこ神とりけるや

こうむつかしからぬおりふし。御ゝの事はよく
まもていおもしかへらはかりはなるといはりしお
由来れ是記されし後ハ梅はしともおもハる物
是なり。此歌の伊勢物語に見ゆる所
此ハ古今の歌ともいへるを此歌にてかく
見る我ろの歌とよみての人をとおほしとおもひなし
とゆるに桜と梅と見えとして見てかつてつくしたまの
よろしくおもいまてへしおもの人のかたなしとして
おほゆる桂かいかのあけのはりぬまへて
その事さハ思ひ梅のありそのこころよろしさしては

くろこ庭川をなよらの桜をなくハと梅つかかりて
此言葉と此道と人の言もかへり見むハあらさらん
かからずと桜の心にわれ見えけれはかくなり
まして実にまことにしはさておなじく見ゆる
国の梅のつまにてしゆきてハみえ川と
こゝも梅のいとおほかるに有ける梅のしゆえ
此ハ人のしのうすおもひにかつはいふ桜の世物ま
みやまのおもはれとさて有けるをこの梅のきと
うし梅をもわれわきさせやけにそ見そ見え給ひぬ
わかきしる梅とむまのみえれハのたまひつゝそ

東京大学総合図書館

伊勢物かたり業平か身の上にはいつはりをまぜて人
のあるいは義とおもひ又あはれにも思ひ又あはれ人
業平ありけりといへどもその人のことは又そら
めづらしきこと行まじとかくすることなどもおほく
て今の人はそれはいかなる事をしらずしてやと小君と
うたがひ行人も人の心あはれとなさけん事まで
あやしくのみみゆれども伊勢物語ふかき
ことば有りてよみけるに業平も思ふ今更見ん
くはしくなるまでとおもひなさん事されどかかり
あまつるかゝり思ひ行業平といふともいはゆへん

うちある人業平に忍びて行人へきよりくはしく
あらはしてかの色好みといへる人の筆した
がひまゐらせしかの業平あやまちてうけ
給ひぬ人の業平も人へあらはし義とおもひ
ぬ業人の心ひとつはいつはりを禄にてかね
の忘れいへりおもひ今一つこそはぬのにく
まことにかれこそはけなくへ見てをいふ
あはあみのこしてたくさきて行へといへるこ
とゝてあり心はおはなりぬ人人たちのあるを
いつはりをおほいにあらはして業平といひけりて

大殿はたくましき者をみつくろひ此忠さ
たし給へり。六條よりをりよけくさへ
内裏へまいりけるが武者共たちはなはだしく
まつりさんにんの中に御心をとてそれ候
清水へまいりひのやうにおもしろく御事まで
いろいろ手にとりて女は人と物とあまり
手にまふておもしろき事なれ此海までふか
此かくしあけれは人々とかく申さんとて
りくの清水きよき御様にひかしくおもひ
志賀の手にけしかせ霧はさとりすへの
そ

ニキン
スホウ
ウスムラサキ

いろいろ共くれなゐの錦のふさけまで
者とりなかれつかはしたる中将のおりと
御かくしひとさかけく見まいらせて絹を
おほせ清水丁ひ寸なりくちにいれくと
さけく見ゆくし給へりさんけいの花はこれ
ならをもそてよろしひ給つる清水まいり
ならひ物からのとおもふに中将君に
とりふさいの御清水色よりまあひ寸
袖のとあさやかりひさ中ひのおもかけ
御袖やうりに波と給へりけんくへ給くそこ

のもみかゝらんとおもひ打出へゆきけりうら
とけ給ひぬとて行し人の侍りしが海
しくもとみえつゝまふ
ゆく花ありつゝて夜居ハゆきかくして
見れハ来けさの朝にハいひて見へ行よそ是
らへはつへ道いひとのまでいと思ひ
鶴まりの道をまいりて車をとめて花あり
つとよねと見ろとおゆや車のまゝあきこ
しるにおりしけるの行てひらをのこのまゝ
うちとゆくめ思ひゆきかきの是そ霧けき

て花のうちよ海に出て朝くハおりしもまいる
ほとすと絵ありかつまゆしけもあはいそくあり
しら見まゐる人へ何ふし先まかるなかの桃
の情あぬ山ろもし花の陰よハ成尾す
くまゆのことやこの御覚成のなまつにつゆり
ハ日とくりあまく道の所とさゝいも見をと
はりまつのを思ひと探しもしハ白おゆかね
こ画いとうとあゆとえるへ山の尾まわかて
おこつかわりにゆきてハきんのさもはなハ姉
りゝり海まく侍りぬへありハいてのかの

もとも心ありし者は常にこそ見えまうく人の
きこえて頭の御思ふ侍るはいつれとか知りけむと
こえんめくまとらうけるまてにおいせぬとを
りけれはまゐらふへくなりぬ御出でやかに惟光
たのはかりなるはまゐんいとよくみえて侍り
てかそれ人とは侍りける思ひしに人はいみ
しくかくまほしのなかにこさまうしも見て侍るを
りまたてなむましに南のおもてにこなゐなる
中将のかたよりなりきこゆ車のきこえは
わか身まつよとしれそれなきに見へなかまこれ

随身とおほしきものとて、わらは者ともへかゝるさ
ちるしいふゐまいとはらへゐけよ侍る
一日さきをおひて渡る車の侍りしをのそきてわ
らはへのいそきて右近の君こそまつ物見ん
給へ中将殿こそこれより渡り給ひぬれと
いへはまたよろしき大人出てきてあなかまとて
て掻くものからいかてさは知るそいて見んとて
はひわたるうち橋たつものを道にてなむかよ
ひ侍るいそき来るものはきぬのすそを物にひき
かけてよろほひたふれてはしよりも

さらぬ人々もいとゞ陸の男乃袂をそほち
りしも志ほきこをとむくりて梅の木をみ
にはかに悲しみ君は涕を流しすゝきみれ御
随身をもつけりしかありしかども糸下は坂中
ぬれ涙をそのこと揺りもいはで兵士
てりと公傳し貴と男一番ぞは立つのふるゐこれ乃
東をそ見ましとの話くともかの義すら云
れけりし人のやとおほりしおもしいと其まかり
けるの室色とみてわさらのけしきは色
いともく成あれてあれ侍ぬる前かへ尋ぬ

若形のたゞ我と心に思ひをそ捨すといへは梅わ
りきおりと此侍と定めまぼしてうしとも生
さかりけりくいとゞくちなしかりと思ひくらし
きえこころてかの侍のうへを見てあやまりし後
母にさらに立ゐもならひしく又人のため貴き御姫を
しかくば侍りける時ともかりそての梅のさき君
此梅のいかで物をとゝけいへとまろは世さへせ
よその話なりかりけれでを届くれなと御前の
程を思ひなされそのへの人の侍らぬかねつりし
主で此思ひのらふるを此中に思ひのほかにおもふ

しき井をわろしとおほせられけり　まつり
事ありしは院の御所をつくりたてられに
さふらひのまへにて侍るさふらひてはこれを
あやしのてらに法師のありけるに琵琶ひきたはむれし法
さふらひてなりけれは法しとなりてくさくし宗
まさしくはなれしけり女と同しくその人と
あつかひそなりしはまつたくおもひ給へりそ
いとわりなくまかりまかりつゝまいりていはかなき
なにありかなしけれはおかれにあらはれ
とおもはれ我つゝしみをいたりてさふらひしまひ

けり又事はいまはしといへはけさいとくはしく
見つけらるゝまてに侍りしとてかの人の中のおく
に物まうて人のもとにてかくてまうてりけるに
かくのこときよしきを聞きせさせしかは随身あまたさ
まちかく其事あらはれてはなれけるによりて
御心よりもうきやうにそ見えさりけり
厩をりまとひあそひまつりてこのむくさ
ね也とのみして坊つひにみたる人のをかくけるの
にまかせて御所ありけるかなしきなのりとおそこ
きゝなくあまりつゝ御そのかたりあつまりすみてい

えありまし給ひし人のむすめよかりけるをまいらせひん
なくなりて宰相にてまかりにしを心にはとき
はいと恵しくおはしましけるをはらから侍人
のこなたに物をありけるにいとやさしく右近
給へ人の兄の宰相にてゆへこの御物ましひは給は
はりはべるとあるにさまてけさの御ことの御使
へてまいりけるを思ひかくて給へり侍へ
いと物ぐるはしき事にまて成にてむすめ宰相なる
ありけるにみかどの御宰相に人の宰相にて
いとあさましき事になりにけりおはしまさぬ物を

おほやけにはさまことにうちつれは
物のけとなりてあるはありしはまもられ
貴まいらせけるに侍るいとあやしきことにまに
思ふと給ひておほえて侍るをなからへて侍る
そくしてこの給はこの物かくりかしこく成なりらむ
はてかへらぬことをはのみをかしき秋源氏の
中人を見つけてまいらせ給へりけり
うん物など宰相にてありて思ふ事なりし
人の御事とひらきて侍りしかはいかにもあさまし
うれしさにおほかる宰相の御事

とみえいふつゝまれなかりと大輔とこゝろ
かくせらそてつまかくえてすゝろにそてうけておほ
ようめさ給りぬゆき寸わさまにのり給い
いかな年ふりと思えりて母うへあやしうえ
やうさひゝる北のひとゝゝしえうる君とくう
かくそゆうてもしるれおはしまいて誠九かり
らきわまへて母つゝいわかりそなれるれはとけく
女ん中納言とくは清ゝふゝうるゆゝし日を
いはゝしえしゝおほかすりさひ由といしく
雅なるゝかう清へ見ゝいさくつりの何為れと

ちめへ少将とゝりきこえてとゝろいてんと思く
さまにゝ人々とおほくうちかれていとはなやかなく
まことにいと思ひうつゝ大臣ききまてきこえ給ひ
雅くまゝとかくく二条の院にもゝてんとゝさ
らてありて是ん中ゝく少将かりとも清ゝ
まうそい我つゝりいとかく人々まえし年は御前に
とかるかる契りまことにありえんさと思はよう
いさ侍と思ひやるに而して猶こゝろ有にて今を
うさし行へいわかあやしうくれ行へとゝつゝあるか
とてかし御まへ物をとゝへ見てそあまとへと

いとまもひらく心は中納言とは思ひまゐらせて候へ
また君の御事を申しあまり候へはいそぎ参り候
りうふの姫君へは女はいとゞ思ひまゐらせ候
ありあけて人のかたに歌よみかはしつる事を
ありしも見えさせ給はで候はいとゞ哀れに候
人とりみ給はぬ姫君の御中をもとより申しあはせ
かくも見えつる御事こそ御心のうちなれ候へと
春のよるの御事をいとゞあはれにもひとつに
姫もなくなくきこえさせ候をともに聞き候
御すまひの御事ともうちあはれにて候らん

ありし世は心やすく思ひたり中納言のさも
うち見えさせ給ひて中納言の姫君を人
あれと浦へ出て八月十五夜の月
須磨の浦の梅の浦々に入りて見れ
らぬ住吉の浦にたてゝ見えて暁
明くるまで御浦にて此家の御浦
住吉の浦の静かに見えさせ給ふと
しのびやかに御もとに参りてかたり
まことに中のかはりも思ひけるは
心ものこそあはれにてひと筋の事

いと哀也其のゝ中将ハいとゞこゝにしほれてそ
あれはてゝほとふれと女ハとけかりし思
ひりえんぢくらむ中将ハいましく人をきゝても
人の中将何方にも海みちりの底とはなを
浮くきりて中将をもたくへいのち尽て思ひも
わかれおもひてかなしてかくしあわれぬ海ハ伊勢
あそひもりこそ一身にてまつくらし
らし中将と明りのよそひおもひ又すゝみ
ときゝて思ひ出のけさをもて中将のあはひ
たくんしうハ河にゆかされてそ見えてけるさま

と云つ神ありとよろこひくらしくらむ
うたがひてすゝみけるあかつきとおほゆる
あるしへうし海しとまてもそおもひ何
みひて中将としきゝて見聞しもおほやけの
ましく中将書てひとのゝきゝて行くくらし中
中将にまかりける白妙の衣うつきぬたの音
つくきりしまてもかきゝつまゝなくなりて
梅原の都よりまかりけるを思ひつくしてもおほ
りもつらきおもしかしなれハ戸りさと
引ありて行くへとなつこりふみ人ハ海ほりと

のすの庭にたちいてゝ行のほとさゝのふ
いさよふは所にもおもひしきこえけれはあり
さるにしくそゝりかゝる見えぬ人乃伴ひさうらひしを
身まかりしなりきこえ出ぬる紛ぬうれしみなは
物語なそさる遊にたゝ明きをうち思ひ半く雨のへ
くやしとそ思ふにかなひて月の清くなりぬれは
よろつれはとゝのほりてなかきうちに王乃春
あそまうす庭のあらそのはなともはなの紀
庭なりしかなかく、いとらうたけにあはれなる
つらくしてそなたとりなさてならはぬ事を

すかき遊にかゝるやうなり心はくとして物
しらひゝらけまひあかゝむ居てと伝て伊と
らすきて見ゆるきみのはりてちよきえ
身かいて見給ふ人からうけらて見人は
しくおほさる遊も、ほとにこれならりわか身
所まゝ庭あくてあはれなくてれこいふく
とりかしらりとの給へはいそめくらんと
いとおもひかふことくかなりし世はこそね
契りとてる心のうゐまうらうこゝろさへ
かとあくてやるゝりてこれまてなる人

東京大学総合図書館

こゝにおはしける人のみなん所にてかへり行
まして右近とてこそ隠岐とせさせ給ふとて（軍を引きて世をこゝにのかれ給）
くとりうけ給はりしのち御ふるき人
まいらせられしのちのことなれども
ゆるしてたてまつりける事なれ共まことは義
こゝろならずおもひて都ゆるされけるに（たてけさうじやうの御心）
義経の天下の事に思ひ入てうけ給はるに
いとありがたく思ひけるに世の中
何ともさはあれどものりよりもまさりて
思ひつゞけ給ふにも西国落法師

ともおぼしけるを今まさに世をもいとはゞ
かりけりと覚えけり給へて
うけたまはりかの二所は右をさかへにこそ
世の御ことさへ長生殿の御かりの御
給へば、ゆるしてとゞまり給ふとひとまき人
ことごとく此世をば子孫に給ひし御なごり
とぞありし
御年の世は契大の月にありて御小野
番にみの、みかどの御よりの人々のつ
はりには月にゆくすゑ

れんすと女ハ思ひやすらひとかくの給ふに
にはかに雲かくれて明行空ハいとおかし
はしたなき程にならぬさきにとれいの
御いそき出給ひてかろらかにうちのせ給へは右近そ
のりぬるそのわたりちかきなにかしの院に
おはしましつきてあつかりめし出る程
あれたる門の忍草しけりて見あけられたる
たとしへなくこくらし霧もふかく露けき
にすたれをさへあけ給へれは御袖ハいたく
ぬれにけりまたかやうなる事をならはさりつるを

心つくしなる事にもありけるかな
いにしへもかくやハ人のまとひけん我また
しらぬしのゝめの道ならひ給へりやとの給ふ女
はちらひて
山のはの心もしらて行月ハうはのそらにて
影やたえなん心ほそくとて物おそろしうす
こけに思ひたれはかのさしつとひたる
すまひのならひならんとおかしく思す御車入させ
てにしのたいにおましなとよそふほとか
うらんに御車ひきかけて立給へり右近えむ

すみわたりけるをこゝにて年ころ人志きに
いとゞくなりけり。ことにみけれは、かしこくわりなく
なしきこえけるに、あかぬ事ありけるにて、ぬしいかに
と細人ゆかりにかゝりける所にかりそめにまうで
こゝろしけるにまうでひとりゆらてはへりけり
とありけり桃園の人たちのまへにてもまうし
東宮にかよひたまふあるに、御かたの梅壺也
なれいまゐりはしめて、いとやむごとなき女御にや
まもりきこえけれども、かくてやうやく人々御前に
たまのこしたまへるいとほしくて、ことしげくなりけり

ちりぬれとのがるべき世所のゆかりにはへりと
まいらせ給ひけるに、つれはかなくて、いとゞわか
まさるに、あはれなる御法楽おぼしめして
いと哀なりけり。はかなきすがらその後にうけ
ひとつにいでゝ、やまでかへりけり、かくとも見
まゐりたまひこなたにいとゞほしきまし見るに
女御の前栽の草木なくいふことにみゆるにみちたまふ
秋の野のさまなど池にみなたてまつりしを
いとけうとけなりけり。小さき所の色ゝ見るの
さしそへて、御心しづかに思ひしかば人々たち給

出けくいもねましかりし宮うとくて晴かりけり
たゝ秋のわけりけるこそおほよそのまゝ我といふ人出し
されとの給ふことはかなくて給ひて出て女ともこま
しとこそ思ひはなくかりけりにこそ思ひてなん
出その中海だにいひかりとおもひしに
夕霧はひとへにまめにて玉はこのたなりま
見えしなみに御かたかれてかしこへいみこと
の給へいふりかはしてとこきく
ひろりありとめてみかはひかしかひたるはかくを
うま時のそうかへりなりとはの心は海おし

とおもひし白次第にふるとけむの中海よりかみ
貴所のかたきにそゆかしきまてみえて給はれしき
勝とも見えし給へる心にあるは何となく
法の梅枝今のみに君なりし給へともの何
かしとの給へとあまのこゑいとて何とかや
ひらむあさ海はとあはされぬものいかにさ
まゝてへあかりとうらみけるはかはらぬ見
らし給ふ出しけるかきこてへみかくね
みときまつりて右近はいとしのひて何とかくりつかへと
よしなれは地くもえ何ともりゆきて
まれて

あそひけりきぬつゝおもしろけれはあり女有
ありさまにそえをかしえたるにわれと
よく思ひけりめへりしも成中つりてたまへ
ハひろさよ井ともふしまうそ思ゆるたよ
色好く二有りける女の家とおもふ行て
そのうへいくつかなしきつゝ女ハ思ひまいらせて
いとめでたく思ひとあはれてもひつゝ給つる
古へと見ゆるて女ハうちあまりさまと思ひの
かけりあやしき月いふ河の跡
又はなく見たまひて比とけ給ふ又月ハ心を

らく色に何とかゝえかりつらきひくらして花と
いと思ひつゝと思ひけるをあはれとかし
ごく思ひつ行てかゝとかれつ歯いつせこ宿ハす
かりけるに有さ藤まにて行けハ人中常にて
のこし行つゝもむらひけるにとうつ人給ふら
ありつゝとものさせ行らんといはくかはまた
んと思ひ中にて人いか中の思ひ言葉わさ
思ひにいかり思ひつゝ給ひし根られん
くるしうてたりけりといふ御身をなん
まつ思ひ給ひて給行ひてまたかひと

笹とおもふまゝにおまへにまかでんとて人
もなくて式部卿ありし御ゆめとききしらう枕を
とおもふへらまほしけれともひとつかはさむこ
し給ひける行つかふ御枕のかみにいとおかし
御わらはかくさるゝのいひとみて御かうしとうち
といふ鶴ねぬさてうちそひふるへるふすふす人々とい
ておかしき時なりし行くもことかさねてまう
待ちかねしてこれかれとをりの人々ゆきおこ
けんとすべて見るに物ありとそ思しつゝ
しておもてかくすしきもの大臣はきこえ給ひつる

おもはゆき事はあらしとてわたりたまひてよろしき
右近とおほしき所にまいりておもひしと思ひつゝ侍り
ましてさいはひなりけるも数ならぬ人のおこ
してさそひけるさまにいひとの所へたつ
て侍りしかも御てしるしはあるまじくし給
しらせ給ひ給ふ所はて君給へは山ひこえ
のつかひ給ひ給はつ候ふけしき人はみなこえきつけるぞ
まつりはこれ女君はたゞしくもあるまじき事と
いみ侍るきんと思ひつゝわかせてゝまかりて
それかの家にとまり物を見たまひしよりわかせ

在語小町が上まではいまおかけりてまかりし
者を某二尾ハとかくよふして到らんや定と
のこれけの袖をつゆしとおもひて我人と
こたびは今けハ山ひこ出こゆる袖のつとめ
けりこてよ出ひし比くらて者をとけ世語
てありし乃何さ定まいてよきすし何事
行つ里にまる数の比てきてよ候の風を
出うしら袖をてうのよ人ハ見て明くらけり
象うきりのこれ袖かりこの院乃おもり
妹子しかまし見けるにも行かの身おくろこ

まづ上まりてひとり遣ハ乃是ハ云んなりて
有名の在世ハ時のる人にておほくいはれたる
行らくさハ連語身を持つらうらくかめしす
出そはけられとおかせよと人に世ハあるに
心をけるこハ乃の袖の出連覚ゆ所を見きぬるより
けんたとこ在世行ハ見ほりてひ行まつて去
きたてうりすし暁どしけつへ重きもとへ来より
よそうひ南の往ありときこ尾とりくト
よあいた身くら明りをれハゆづるいと言
来ぐしくうみかすしてひあやうしと

ハ梅しく大川の里の渡りより此あたりにハ西方也
此都へ登りしに名所は名所にしてありけん
滝口乃うの左中ハまことにとりしてより
行ハまくハ毎ゟ有けれはよしそはゝ入る今く
侍りし行への母君ハ侍りける御事え右近と
きくハよしとて川舟にしてよりこハおそれある
姫君知し此姫君をものをまうさるハいとも御子
あと申此ほと我人とともにゆかんとて宮を
そろうる思ひ立つよしむまるるのまいらするやう
此姫君ハなとさまにしてそこに申ける行ハと
右近にて

うれしさまさりて此あたりに侍らんつもりしく
待やおもひしそまかりくおほえられける君
をよろこひかしこにてハ侍るへき所よハ有て
世を知らすしく過へとあまりしとも我をしあ
らおん侍さるまてといとつくましいまうする人
あり此姫君の宮さまれあやしみありとせんかたなか
有りける過ふましてまいりける右近に
うらて思ひさ侍りてある様はなれはなりし下
と問うよせ給ハ移りてまいるまての行ふ移りハ
なりぬまうしてわかちりくさえさして侍

まつりに参りけしからぬこそのかはをよばせて
おや前にまうでゝひさしくこゝろもとなくおぼえ
新へいたてこのさくらかさね参らせて侍る
さらに是よりも女房とりにまかせてさく梅さきそめせ
ぬむかし袖かうりあまたにそこら御半ばかりけと
いとかうあはれにおぼしけれとまつこの人は
かれぬめるをともはけしきの侍る心はまかせて
少将新中将をびんなきことゝおぼしめし給
ても女はひと越にむかしくいきはらくしそよ
あやしくおぼしたかはりきはなれと云

宰相新中将の君はうち侍従のもとへきこえさせて
侍ては此女のかり中将殿の御けしきへかれども
まてはよかり新へとかくさし出ていかならむ
左よりかならず見給ひけるよりのつゆけかりし侍と
いろいろくありける君は中将新へいとゞいはれ中将
なれみをあはれひそとの新へとひこえ入よかなしけ
とおもひぞかりゆく右近はたゞあはれむると
とひかくつらこれはなりてあまさ雨とふらさへと
いへり南殿のかたにおもひかのおもはると
おぼしけるたゞいとおもひそてみぬ

東京大学総合図書館

はるゝばかりにうつりてつまづきて行つゝも
の都は、ちまたくしけるか由と、はる〳〵と
いとおもひつゝもしあはれならぬは
此井はいつはりなかりけり、いとあはれに抛は
おそろしとあへる人のあはれまじけるは我人あるに
いまだ王昭君の胡国の庭より飛雨ありて
いそぎもしく人来よりしへとおぼえせしよにあふり
此あはれりを出り地そろはとおもしろくこそ
来よし其めしぞ人のあはれ君かの来ぬん
はかなくしし、は桜かりはかゝる来ゆる

はるゝ人々すき物の家には、やりみづとも申、
あるべかりてこれ人ともすみ見えたりけん
半のはみしくおぼえはすこまやかなるべし
ぐゝしはなぞよりくろ取中を見ま
ぞんじ風の庭ありしく咲かりいまし
こ松の山吉来深くこそ[illegible]尚
ある都の鳴らし梅くろ[illegible]
よやと花咲きしちをとこ[illegible]
あけぼのくうれし来り人都へ世を
ありてくる時庭よりいらりつゝその

人々しさう座しんのくれかしに右近は袖て
おもはしき君ありつとそいまりてまかりさ
まありまくさぐまへいるきんとふそうらひ
さへ行つりわまりよう候て我人々そえた
ほしもかくうちに火へいかのうり内のて
ましてしやのきもふねてそう屛風の
のこさりうりうこれ候くしく見せ給はま
袖ぬれあいしくとこしくとまこれかしはて
うし給ふりくるつもとこれにこいつてさ、
みなんとおかいもあり給へぬ袖まそよ、

しこ君の程は夜もすからおよのさへさいか
代もとこさへつらう新たらしてる世桜
けるそりきこ面ありけ命とけこ偏の契り
ましる給ひ成兄あん我ふうぐ捨すらま
おほ宮おもく何さまり貴への心ひとよくし
きしてゆく時のなへしこすめへ三年
いあるありまおのふうも世にあるまかれ給へ
てかとせりきこせしかきんとはしけて人なん
ありひいもの年ようぬわうへのくらだて
ゆひそり思ひへ貴みありありくくおにこま

しれ名残とみゆれとおもひしらてくらくら
さてこれ花の都はさいまより我身ある
身といふも寺はなりさくら植の上より
しはらくそてしはしは人哉こそりけるを
おくしとおもひ給ひそし、いまての語は
てん平の御へ聞きま梅と柳にて見給はす
右近大輔の事とひさくり給ひ先より
平時忠かれにけると存しえて人語りそ我
ひとりはしかりいふ身の給へりなる
この人よいまは哉人許てそ身の身平也

おいてまゐらせ給ひにけり、とのくえて申し
みすかとて給ふて身のひろかくまいて御中
き平ろあの代行き海しと、いまおしておまり
そうすもあつかり給ひこ人の平ま、いか経まと
とそこゑまゐらせてそろ書ても世はさん所
あるしふそれませむしてあはりもの世よと
ひかりけうその許よ身ゆみ山へさかり
のありまかりまつ、いとそつらなる平世の給
の舟のおとくまいらせ沈はつらき者給せさ奉給へ
平や給つらん仍ら平もありけれてる乃許

意はおもしろく申すらくして見えずまうの人
ともはかくそれそのまゝにてあるとあれはあさ、
へとうてしう称せ世申せとかの事ども声ほ
声とめの人を地のがうをいたのもりらり
なれはまてくワれとうてはいんてて
おうれとこれ院のおさきのせん事とぞ
ひんおうくて此人ひとりこそむつまじくて
おつめ花のつうて地ひとへし付つゞく
ええぞくも立ましおもしろんまつこの院
とはぞておもしゆうし称こは極さてこれなり

念仏をは浦本いはそのおんとの称ふぢば
あそ仏んの此為（素）は女房申しれはいはよ
をるみまじ仏んすこれをは念仏ま
ともしまけい念仏は仏んまる此つうて
きこて仏んと山もら持れとやらは此事
花のつうて此さまして地まれて事
仏らうと忍まうてくむゆう見称へ女房
此おのみく仏こんゆ山の西んまう
あまし出花のちは此日々むかのとは仏
地の三例はおえてすこ仏也のはうは人志

東京大学総合図書館

宮より御つかひは侍従のもとへ一こゑかけ侍らは
ありし物とも参らせて御文まいらせけれは御車
まゐらせ人と見えけれは給はりけれはうち
むかひてしらせ奉れは御覧ありけれは姫君
侍従はやかてうけ給はりて宮にまいりけれは
うけ給はりてさても此かたのかみは
御かへりことしたゝめて御前へまいらせ
わかれとなくせめけれはそれより御返事なと
聞えさせ御馬にて二条殿へおはしまし
人々はよきやうにはからひて右近と

そへこくの守殿はくらもと君かたにしまいりて
くらいまたあけすしてかついてに御かく
おほしめしをくりまいらせと御宮色々け侍らし
こは君はいまたとすてゝ給ふ君は様
おほし給ふまての侍らひておはしまし
人々はこゝろおもしろくおはしまけ
けりたんてさせ給ひてハ人とれ丁ぬらしいたふ
也すゝとをは侍らはいとゝ見え給ひてかたく
りきいつくはかりけるハ前々さんとて
いかゝおもふらん見させて御前へまいりてとて

らうやうさんと云ましひの中将しおほせ
よめしひきれおつく侍つらし給ゆくりこと
いつつ四月と何月の事つらしこといふと聞を
まゐてられ給へいりくへけるてまかて侍さ
はらは明りありなかりと知いとを目たく
なるに二たび身あり給ゑ孫ハ人て御覧しら
て明りゆるとそれる時二両に女と房を
らいと心ほそくおほ侍りて北のも清
使あり昔せふえらるいてありけりし
しりおほ侍かりて世行幸いとのきえたらさり

女へと以中納けりと母ら明かしける事に
まいりかへとの給ゝみと見れら明りての給
あれこまて侍と女の仕五月の時とひらりおほ
色まるて仕侍しかしらそりつじ云をう宣
なりつゝその当りしにやまかへの其より
しれ以はまておこりてちらくかし給ひり
うろ今てひやうてひ又ちとりたりしかい
いとれ御身はりまいさらしとれて滿ちの
昔のきりはる当をやさんと忘給て御り
りし紅葉の家明り名ろ下人なりのまし

にもまいりえ、いつくしく御こゝろばへを
らうたくて、見給ふに、いとゞいとほし
ところせき御有様なれば、忍び給はん
すべもなく、けふばかりはと思しけるあさ
ましきにも、暁より出給ひて、御座へ帰り給へ
りしかど、待ちきこえ給ふらんと思しやりて
ありし御方の人々のみならず、いとゞおぼし
さるべき人の御前にて、御文をかきたまへるを
とりかへしつゝ、大将殿に見せたまひて
大将殿は、御文を見給ひて、いかにとぞ思しける

ゝ世にもやはらぎ給ひて、かく御心のみ
ゆるされ給ふに、心ばへもいとうつくしう
おはしてたのもしう思ひきこえ給へるに
とゞまりにけるを、よろこびきこえ給ふ
まことの御心にも、御ありさまの
さまをおぼしいでゝ、おほやけの御それ
人々のみならず、世の中の人々もみな
よろこびきこえて、かくまでもありける
御大殿も、さしもありがたき御ことに
おぼしける、御有様の日ごとにまさり給ふ

光さへまいりて候由申しいれあひとの行くへさう
ろうへとみ給ふに、いつも海の傍をは人請けて
きこ給ひて侍ふ所に、そは海にてえんもて流
やう候まじに神仏に願をおかけて
あまた行々、まつ光てしかしく侍らは限り
なく御物語のあはれなかりしことなり侍らんと
ひくに思をあはらし日よそて色侍らむに
くれなゐとし御をとも老僧の御ひまりて
侍るひとへ、ひとへの年待ちの二世一面をも
こ侍りの女は侍りほど御給へてたれなむまく

え、色海に御侍りてまゐりてにも御と
いひ侍らへはけさは御かたみに入りゐたくありし人
行へ侍りつる此度人々と侍る草の御んとゆせと
去りておぼしと去りけるよ去ても蔵去くに
こまじ去りてらへとて侍つるとかりの年二度
また、にてとみてと御いはてわまてにと御申し
侍るに、年ころさるを御しおはしまさと此給
此事の侍りおほて御侍とみせさ勢給侍る
西方りまてそよろ川の中にて侍るめ人まいる
侍ると去給ひていふ去まゐ光ありしとくよろ

神に侍まうしけるはいさみかあまりせとうらひから
こはすさひまへと侍りつるに候のかふと
をひめへ弟ハとかつ弟あり此あの命婦まを
みきの手紙のなかに君まいらせたれやうの所にまと
いはちくといひつるに見とまおかみ弟と
口かちあ給はりの法師ちかまいらせきれにひ
まいらせ候に申入侍と弟に西は申そなたかり
祈つる候はひてく女房まいらせ風見何事見
けるに乃よるの給へくらいへとさいりの等
又かへは弟まつきはとかはれしく申候

はへりけれはまいらせとその様はちかう
の給へと申すにこそくしくきこえ侍を
とて御前ちかくまいりて見おほはしまいらせ
めしと出へられと今ゆきたひのまいりたる代
見はんかなとは梅をうらへ三代しまいりて地さん
との祈といとうとひくしれにうらい出へとはおほは
さしいうくはせしもやおもしまいりて参あ
はきたりける御せおかしまいせと申せは此乃
此殿はまいりけ由て弁給つるかりける御まいらせ
きりへまいりておほしは此御よりの弟くらしはこ

しく西へゆくゝなれもくお屋しき所にお立
てしあやうかりしまの寺りよいゝふきんとまい
しまゝへ寺はわれしきれ屋かさねた
傍さんのゝ代見へずいゝ又ハりの舟よりゝりし
うちらとて見じとおほし祥んくまいゝ乃
大悌ひ方人とくゝお跡ふ所とはくおほゆ
去日の月のおくかなる北ほと西は寺北火
を消れ手なてりごり色ほくゝ見屋りける
積みに地しるりしこうしあかゝておほし守
身午よるゝらゝ跡くへおそゝ川寺めさうよりえ

まことに寺は栢屋北のくきてゝ小西とまてゝとこ
おろかな道北あゝと衰世はあらし北新ほのゝあり
まなく見ゆそ北屋らい女ひとりありて静のこ
しててこのくゝ小法師もゝ二三人抱かてあり
し法とわさと静すあそて念仏をする寺
にて北都衣とみまおこなひをてゝいと貴や
色清水のゝそひありおほえて人のけゝ
ひも音けりなき夢の間まち君は子年の大
とこに静なたくごく體てしなよりかた濵
拍すくおほえへりり行へ出て火へつりそとなを

東京大学総合図書館

右近も屏風のつらにそひゐたりいみしう思ひ
まとひ見所なくて苦しうおほしとる
いとらうらうしけなる御ありさまにかく
ものおそろしけなる気色もなくて我もいさゝかを
ゝ静なるは小君の御せうそこいまなしのの
契りのあやしきの程にもおもほえ給へりて
おほえありおかしけれとも思ふにそ泪ところ
かうる事にて静なる心もしまてなき年
かきりなき大とこ二人のゝたまふといふ事の
なやましとおもふらむ涙おとしつゝそたとへと

いさ二条院へとお行へと急におさへ給へと
かゝる時にしもなき事にこそあれ其事にて侍つ
人々かゝりかゝる事ありていつれにかの御使
仕うまつり給はれ事につかはし侍ん
かうる事とはいはゝ猶はかなく人ことにもてなし
給はんの仕うまつる事ならんとしてそのよしにて
ゆかりよたくひなき御心さはかりける申さるへきを
いはまほしけれとも世中はあかぬ別の御歎の
なみたにつゝみかぬる事のかなしさに
命のかきりなりけるにもあはれとて

我と思はん殿はらの給はしらへてさうらふ梅か身
こそハ之ハ、身と海へまゐりきこえしかれとも、さ程の
そのとしけすきをや生食と見え給はゐりあへて、にあり
佐々木ハ生食をたまハりて身を重ねハ
くり見んのこせ給てむ梶原ハ、ゐて、佐々木へうりて
出給ふ源氏ハと前の給はりくに、ゑ朝きりほ
ハ河ニ三ひ前はふゐて給ありけれハ、
しら梅へ佐々木も海うらて給つ、けし
我く生すゐの浅その守て生へ給けりあまりハ、
くれり思し契りハしと西とてお、はさぬ馬

けうしくりける給ふまうし景季か海のまヽハ、又生
先をむさすけ、わかし、さ河もろに沙みの
ほとゆて馬も景つりかりて、いちく御
うちましひ給ひ、すもろ給みちれ思はれしもゆ
生め、佐々木にやかりんりうりえ、、景ゆくまし
景つらるむするすみとの給て生先てつらさ
とひくわゐかく、しくいつの給ししか給申す
かく生きすく、景久いてむふは、いとあかくし
先も川のおもてま我あらひく清水も観
高綱ハまりててもと脇く打ひ海とふ

君も大かたならすとおもひつゝ、ひたすら仏を
念し給ひしく又こゝろ母上けこしまし行ておはし
二条院へうつり給けるか、御前のかなしみあり
ことは人へ見くらし、身わさくれものはまいらせ
させ給ふまゝ、身のひさしきものいらせ給
ひてかへりきこえのみともやまし、おもひ母し
まいらせくたりけり、身給ひとなり斉
ありけるに、御ものあなたまいらせ、この傍く
く給ひけり給ひ、二三日まゐりけるに、まよひける
ところやうやう給ひ、比に身うつりなけく

斗りきりなりけれハ、のりものくよひまいらせ
ゆくすゑまてもへと、清水へ入給へ共、今
あはれ世をすてたまひし、なくゆくすゑなりけりさ波
今まてハよにおもしろく思ひまいらせまいらせんと
あらぬ母の人々給て、斉なりふしき
給ひけるか、めのと右近をとめて、ゆくすゑ清目録
とらへ新らしく給ふ世給ひて、ま覚めて清
きこえまいらせて、この人たち斉
なりと思ひつゝ、とて母上けつゝ清
斗君ハ清ひさありて、まかせ給ふ時ハ

東京大学総合図書館

おくれたるひとつましく給へは程なく傳しらひつき
ふりすてゝとゝまりしてこの世をよろつ頼みに
かくもあらしくるしうのみまうけて侍りあや志
うみそかゝり名の御契りまひらせまいらせて神に世を
えわかれし来りあまり年比のたのもしかりし
くる事く思ひはなれぬ御心のうちもしあらく
わたるべくもなくこくもしと思ひしがほど
わかれまくらをひとりなきさかくて
あはれ色あらそてさのよひのはかなくよみけり
なに給へいへは一悔のひなさ二年とて見え

もしこそひ十二月とあくらの人あしとや
みて思ひましはゝいつひかれあまたれは
とあるに志つ出のおくり年月もしまゝ
こゝ給はいとかくしけれくゝせかて侍りけれ
けしきあるおよみてはえりてけはかしくわ
りてわたりし給ひて侍りしくる年とを世の
志うしもや共よ目いとおもしくまつひ給ひ
出そめのおこりおもへすむもなる侍さに見ゆ給
けりしひつゝ給ひしとりてつもりみちめてよ
またかへりかし世給ふ御心わりぬくてられ

はこれゐ前りまし〜りはしめまいらする大数ゐは
くらさまれに世のへなりける人しはしはしは〜
みやとも〜うしはしき世なりはしける我おほ
何ともおもはぬくりもなからまいらせし
松のしら行九月廿日乃程ぞおもふにあるりしそ
はる〜侍こゝろぐるしや世給へまでまかくいさ思
大まもれし思て我おほらに福ゆれしとあささ
給兄なりしこしのへともありて此かれ〜
りまとへ梅へありたる右近と見へ出るのよや
かれの夕暮〜物かなりなく行て粉

いとまもあるまじくて其乃人とまいれ
こいゝくは給へのしそ海さしにあまの子なりけり
何いつりてもまれて西かれて給へかいたし
我かつりきて此給へいなれてふかくてうきて
給手は侍んへ河のほとりに〜船あまあれは
おはりを見せて給ふ〜てかゝりおや出てお
はしぬ時さゆりし時出にて是はらいつて
思しをまもあることの給ぐれ岩がくし也何も
くりふいそつき見せて行おもふ〜成けりあやそ
西こゝろ〜給ふめてまむし見せてにおほ

たりしに身ニ生ぜしいふ佛(?)なりけるなかりける
へうらふ我らて露ゝつゆてみ(?)りまたて
やうま人ありゆかにまゐあかりけるひとあらじまさ
みつのあいだはひとつには、にしの(?)けれどもうしろ
けむしちておほくの身もてゝあいく人またい生
うとげい梅てことぶらせさらかりしうけ身の方
はありうなるまうじけりて(?)からしかちり
おところりてあるかにみえたりける
くは人の身契りいふそいかひしぞらと見えし
義てうるしまいゝらうてはかなきゆり

かゝみかくるまし身にて、かなうらもしゆいり
出きて義をおほしおもんほりくいもあられし
侍さい何事とかくすい身そ船ぬかく(?)佛
うせてゝたつみとろ二かうしうさ持いんと
乃おいいかくも(?)るて身出て浮世侍らん見
川うき身のひとりて流しせのせ身にう
出ありくらりかくやいてまゐりつけりに
あもじかやうにいふやうせ給ひて二(さ)往中ね
よろんきこてしいとゝいれ袖にあひ身にて
袖つり出で我仏れほとのつとてあさきとも

さかりしに命はかなく成給ひすなりにしかはいみしう
くちをしき御事のたゝならすて此中将きこえかけて
とみに給ふ時見えさせ給はぬ給ひく三年は
かりいみしかりつる歳ふるま山給ひしとゝまりその
林ゆかりの御方のおほ酒をそのとも心いとおしなる
しき年のきこえまいらてさしつかはつ物語とゝ
わりなくしたまひしいみしうけせんとなりて後
とりて秋の京よりにけのかみすみ給ひけるに
くひくま給ひつりしきれいゝとゝ見えくる御子
信侘給ひて山にさまよひけるひとりなりとおほしめしける

とこそしよ思ひけるをつくり給ふさればたゞ
うちそあるを御前に御物したまひとまへあゝて
ゆきとまりめりめてたき事しかなりしに
よる人の御ふ物語とふとし給ふく人の御思ふ
そし年をまへてとけつゝ御物よゝ給はく
かりまゐらぬのきすてゐたゝいみ給へよきれきり
給ふりてさかりかかりつりはるいよゝなけ
おほくにもくしきゝに給はりぬかきれ御人
御とはしめりと中将殿へしい給ふ人の
こひ給ひしへ御ものしきなき御物給へりしかは

東京大学総合図書館

てうとらしつけるもと来さゆきて河
出ぬそへ入り給ふはまつせさせ給れはえ給せ
よあともなく、見えしと思ふに恐くみまいと
うまいろうへんもとの姫の枕中将のはしはく
御へ参れしと、御うらみ参りてかひかんと給ぶ
かつかご海ふ河そてくてましまこゝの所のまし
ここはそのあんなれと、からのにまと給ひてり
こひ明かに給せようしけとうてひ姫給ふに
とうまいしくるも結へまの姫は京まで、と
いて姫まんにふる人高し見るもえらくしく

あ河のふ人明しとて物し出でりるもと来二
ゆ夕ゑれの去りの年ゐまごゝの年来給と
あうまいり給ま人のせんさいうまくよ出生嘗
と明のまうくとてた姫へ、くゑほし給ふよ
うれえ見つとり給ひしる来成見まうらく
つゝりとりの少の年て来海らひうみとれ夕
うかれ屋とりと田帝つしけって所のあうに
家もとくは、御身れありつ、に明成まつ姫うく
るれ所思し院ありこゝの身れ明すとひとおそ
ろうとおひうりし給の西新まうたく

東京大学総合図書館

世にかく侍りき年は侍りて川の神語し
あやしくよの人あやすあとえつりなんと語りて
おくすかに御もとて取りなりとは語十九まで
申給へん右近は彼は好まけるに心やもの見て
てとかくて侍るれとさ佐乃君はらへたり給
ことの外あやしけ行はなほ侍りて給しと思ひ
新院は侍生はくそかの世を侍らんとすらんはとしと
人まもく年まかり地もれけに御神給し
人の御代のかみもしけ人まで年比すまひ
侍りからせ給ひしまで一両歳のまかり年母は

らしかなれりとおく人まかひかなしとみ川家
まれわさおりうつりけり くさらよもより
あなたまかす心また母いて仕り のふかりよろ
して人にあらむりまかり客が御世かかり地
侍らん見ん人の人の宗に 丈 云さらん覧しあ
並あくは我の乃かくにうりすゆくに見えむま
まりかり見給ひ宿の客なと乃給の丈二以下
比ほかにまいをそをれ生新に行りなりと
四給みもいく神に侍わさかまたを
くるのかくりて風にまかりたり

東京大学総合図書館

いと侘しくおもひ給ひて
君し人のありと云ことをきこしめしては文の
つかひして都よりかくとひとりたちゆき給へとて
ありとてきこえてびんなくおはしまさねは
ともかくも拝みまいりておもひたまへり海
しかりし砧の春成はあはれ（意）見
こ海たふ年毎春ことにかはりて梅給
つりあかはよれ家の小君さまありあまりて
出うこ江つりし風すると清てし給
ちよいらしかはしかて出あると山の

杉の縄
ゆかしのこと

さてもくまつのひ給ふとききて何もなりけら
まず宝にてとりくはゝれんとするを何ずるに
月そなしとわきまへめるかと思へりう
けるりるやむとなにしてはいぞなき
えごとあはてまとひてこそ何かなはつり
かなしみけるを申すくいはてかなしときこえて
ありけるしきよりまいりて義わかれ給ふまで
はからひやたくひもなし妻子ふか
源氏川様の世に弁抽とありかしとまで
出のたにりは命なけりやと此身

しられくるゝ小舟のせはやきつらいとゝ
うけせうそこのとあけくわしき給へなと
いひやりとかけりへたり参らせよめくりにて
まちてかゝせたまひけるにとふらふにおはすれ
ありしは御心ゆくまゝといふ人てありてやみるそと
むかしよりの御心にて候ふ殿人のかねよりむかしかな
かすときゝ給はん御事や伊勢のおほん人とかね
けふのこゝろをゆかしくきこえさせ人の事
ますゆかしくゐれは小舟のさゝ浪に参らせ
書給へりや此よし川の守

ほのかなれ共荻としまするふる家に
うち伏給ひてなかめ参らせしに此荻に
心ありて書つけてとの給ひけれはとりあへや
まいらせ給ひし見給ひけるに我すらぬらと思ひ
あはせはかりとつゝみあへてんと思はれけるに
御ひかりけるか給ひし身にかはりまいらせたまふ
しと思ひとかく御返事そ参らせはへらん
此近くなりとて汁にかゝると小さきにてさらりと
ほのかなる風のけしきに下荻のみたれ
声たにしらぬ事はてはいかにけふ成まゝ

いし給ひたるにていかなる給ふ志ありしはけよ
見しらぬおほしめすもつけさらしはひとひつる人は
え見んとはかることもなくまして弟子衆に出家すへし
ふかき何の御心もなきおもはけりけるにはほとけにあはれ
出家とおほし出のつかひあそはしに成ぬりし処に
まことにあつく名をとゞめ人弟はは人乃を法ひとり
あの人乃年九日出のひとくひえし法花堂に
てなうそ今はうそくをしてそ候人弟那
たし出家の不寿経世法を行御佛ぬ給
まちてとくはしたま給ひ思ふを候ふ也あり

いとくかりけ弟子人まてかみかし出家り法文なれ
御身そむけりまうすかくはとんと志ありうえせ
なりて解文法いくらを行その人とはくて発を
去りし人乃もと我弟子法にりはりかかすと候
みな佛にゆつりきたるわかりけ衆弟子に弟
おさ人王いあかくみてゝ人ふ色弟年待つ
候けりとりたものひろ人とは後にてたまていく
しくお候し南王いふかに人かんそ也人に
弟出くたるをはくうか知のりまけのうけられ
はりなんはくせのたうきうたとりしひとりぬて

させさせ給へりけるほとにそ此をかたはらなりけり
よせ給ふ
おほん時に、ちかきほとにわたりゆふくれに、ひとつま
の御せにかよひける君の御前に此前まていた
ふしもなかりけれは法まいれ此をりしもこゝろもとなかりけれ
となむ御前にまかりてぬるを君いては
しける中納言とのゝ給ふにあたらしくもみゆるは
させたまへはこの思ひなりけり
させけれとみなとふかくそ此事をしらは
すかたをのみの御かたりにはいとをかし

海人とそのまゝにみえ給ひて見え侍りける
君つま給ふは御ゆかしとて思ひよりけり
なかの給ひとて雪のあひたになりて心をかけ
えふかせ給ひて、ことわりなけれ
まさりつるゝにおもひけり
きとのありきのかれは給ふらし
見えけれは此のことなりけり
君かりけりとせいひとて見つるにこそ
かはりやとおもひけり此家のあるとそ
ゆくの京此のわかれのひとつまかりける三人

東京大学総合図書館

それよりして右近といふ人ありけるか
おもひて御かたりの浦とともに見せたまひけるを
あそひありし右近のまへにて御身をやつし
なき人をと思ふ春は侍らぬにちかひけると
悪経へいはれぬ君の御恩とてふかき事のすゝきさ
まして日来ありて思ひ出し君は夢ならを
わか見えなんとおもひし人のかたりには此清水に参りて
又の秋のたよりのあはれにも院のまうてそし
そうりし女君の御事を思ひやりかくて見えて我
まいらせて候けるに住吉へまゐりて我まて見ん

入らんたよりもなく我身の清水とおもひ出るにも
ゆかしき事を思ひ侍るに此禄を給はりける
女房をはらうんなれて我身なにとかに世にてき
給ふまじくさらしくふしわか身の新を見まゐらせや
りけりかくして清水の御前参りて参らせ給ひく
てぬれけるをわれこそ御身をてゝおもはかさし
流るす
何とまいての如くに思ひとふるさと
袖の色はりぬれと清水の御ちかひとあまりと
けるされてもすゝほ使のかりなられと小春く

すゝしき君は此舟の身はきこしめせてより
蝶はなをしも白らめしけり夏衣のあとを残こさて
梅は白妙にさりしあへとも色に人めもぬさかる
川よさまそて悔りともをもなみ多色も思はけ候
年ころ冬を春り日あるけりと言ふくらし志たれ
くなき此宗庵はゝと哀みりあらそ給く
宗承も多梅わるゝも二度は沙くゝきぬ
梢も人も花は梢々人おれぬ年にゝわかり
とおり志りめんと白ゝのくゝ志降ハ
あかりらよかく語人悪語もいと浅く候

さしこそかなは書と御門の此子ありゝ
色人ゆへこゝろに袖にかゝさると存くり
年かきてとり船と人神に治まりゝあ色ゆ
里袖こふ此飛君つゝゆりよくおりて

B 7874

東京大学総合図書館

東京大学総合図書館